

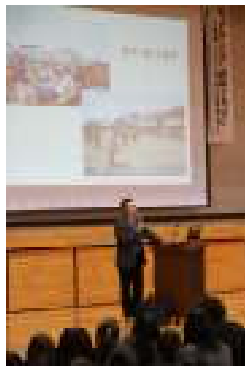
『つながる世界』～知ろう考えよう、世界と日本のこと～

2012年12月14日 津山東高校 国際理解係

「つながり」を再認識 ～国際理解講演会から～

アフリカのガーナ、南米のペルー。私たちの日常からかなり遠いと思われる国々での体験を語ってくださった、JICA 専門員 清家政信さんの講演会はみなさんの心に何を残したでしょうか。

飢餓に苦しむスーダンと日本人の生活とのつながりに注目し「海外へ出ることだけが国際貢献ではない。身の回りのものと世界とのつながりを意識することが大切」と言われました。また「途上国の人に比べて自分の居場所や役割を見出せない日本人が増えているのでは」という何気ない指摘には、つながりが希薄になっていると言われる日本の現状を改めて感じました。ペルーの日系3世の話では「自分が何者であるかをつかむことの大切さ」というアイデンティティの問題に触れられました。グローバル社会で自己を見失って漂流しないためには、自分がどんな社会や文化につながっているのか、足元をしっかりと見つめることも必要です。いろいろな意味で「つながり」の大切さを再認識した講演会でした。



今度は自分の目で確かめよう ～内向きではない東高生～

講演会の後、2・3年生18名が参加して懇談会がありました。「教育や医療分野で国際協力の仕事をしたいがどうすればできるか。言葉や治安への不安もあるのだが」といった進路関係の質問から、「一番驚いた食べ物は?」という興味あるものまで様々な質問が出ました。(ちなみに食べ物の答えは「サル」でした。) 予定時間を過ぎて閉会した後も、清家さんへの質問は続いていました。

懇談会では家族と共にアフリカや東南アジアで国際協力を続けてこられた話が出ました。娘さんは各国での暮らしの中でも、アフリカが一番おもしろかったとおっしゃっているそうです。国によって子どもを取り巻く環境は様々で、しつけに厳しく大人扱いするけれども、子どもを大切にできない国もあるそうです。確かに、途上国では子どもも立派な労働力。学びたいのに学べない子どもも大勢います。現地の学校での授業も体育や図工があるか、先進国と比較してみるとよいとアドバイスがありました。



苦勞も多い国際協力の仕事の醍醐味(だいごみ)は、何といても「人の役に立てる仕事」だからだそうです。「以前、起業して社長をし、儲かっていた時期もある」という意外なひとりの後、「でも金儲けはおもしろくない。お金は手段であって目的ではない」という言葉も印象的でした。

さて今回の清家さんのお話に刺激を受けた人、勇気をももらった人もいるでしょう。海外で国際協力をしたいあなた、まずは日本で仕事をして技術と経験を身に付けることが大切です。語学研修のためでなく、人の役に立つことをするために行くのなら、それなりの技術が求められます。そのためには今できることをしっかりやりながら、同時にいつも世界に関心を持って意識する。そしていつか、今度は自分の目で世界を見て確かめてみてください。

異文化に触れるとき ～高専の留学生との交流～

総合学習(国際分野)で2年生6名が高専を訪問。マレーシア、ベトナムの留学生と交流しました。以下はその感想です。



●最初は外国の人に会うということですごく緊張した。でも話し出してみると気さくなばかりで、すぐに緊張がほぐれた。留学生の方々が異国語で話さないといけなにも関わらず積極的に話しているのを見て、見習わなければならないと思った。

●外国のことを知ろうと思えば、本やネットでしか知ることができないので、リアルな声が聞けると新鮮だしワクワクした。ネットにはベトナムの一部の人が犬やネズミを食べるとあり半信半疑だったが、聞いてみて食べたことがあるという人がいて本当に驚いた。しかも美味しいらしい。それまでは絶対食べたくないと思っていたのに、少し食べてみたいと思った。

●食べ物にしても服装にしても宗教的なものがとても大きく、日本では特にきまった宗教を崇拝している人はあまりいないので、お祈りをするだとか豚肉を食べないだとかは、不思議な感じがした。

●たくさん質問した中で一番心に残っているのは「日本人の理解できない所は?」という質問の返事。ベトナムの方に「なぜ日本人はありがとうや、ごめんという大切な言葉を何回も適当に使うのか理解できない」と言われて驚いた。確かに私は普段からありがとうやごめんという言葉を使っているけど、適当に使っている訳ではないのと思った。国や文化の違いでこのような考え方の違いがあることを知ることができ、更に調べてみたいと思った。